

追手門学院大学
心理学論集第32号抜刷
2024年3月31日発行

資 料

「職業としての心理学」の講義を通じた学生の学びに関する分析
— ミニッツペーパーの感想を用いた横断的調査 —

四 宮 康 亮

(京都府立医科大学)

Analysis of student learning through lectures on "Psychology as an Occupation"

-A cross-sectional survey using minute paper feedback-

Yasuaki Shinomiya

(Kyoto Prefectural University of Medicine)

「職業としての心理学」の講義を通じた学生の学びに関する分析 — ミニッツペーパーの感想を用いた横断的調査 —

四 宮 康 亮

(京都府立医科大学)

Analysis of student learning through lectures on "Psychology as an Occupation" -A cross-sectional survey using minute paper feedback-

Yasuaki Shinomiya

(Kyoto Prefectural University of Medicine)

1. 目 的

本研究は、心理学総合科目「職業としての心理学」にて、初めてゲストスピーカーとして学生に自らの話をし、学生からのミニッツペーパーによる感想を読んだ後、学生の学びの傾向を知りたいと感じたことがきっかけであった。

追手門学院大学では、1995年に開設された人間学部心理学科に総合科目として「人間学特講1」が設置され、2005年度の「特集」に「職業としての心理学」というテーマが取り上げられた(三川・藤田・前田, 2020)。追手門学院大学のSTUDY GUIDEには「幅広い教養的基礎のうえに、多様かつ実践的な心理学的知識や情報科学に関する知識を獲得することで、心理学や情報科学の知識及び方法をさまざまな職業や実生活に活かし、自己実現をめざす豊かな人間性を持つ人材の育成を目的とする」と記載されており、中でも「職業としての心理学」は特色ある授業として位置づけられている(駿地, 2023)。

また、「心理学総合科目」は自分の生き方を考えながらその生き方に応じた心理学の学びを選択することができるようになり、主体的・創造的に自分の人生を設計していく力を身につけるということが目標とされているもので、学生の社会的・職業的自立に資するキャリア教育としても重要な役割を担って

いる(三川ら, 2020)。そのため、三川(2017)および三川・前田(2018)は、キャリア教育の実践においては、その効果について評価を行う必要があると指摘しており、三川・石田・神田・山口(2015)が作成したキャリアデザイン力尺度を用いて、授業の第1回(以下、事前)と授業の終盤(以下、事後)の2度にわたり回答してもらい、授業の前後における受講生のキャリア意識の違いについて検討している(三川, 2017; 三川・前田, 2018; 三川ら, 2020)。その結果、キャリアデザイン力尺度の下位尺度である「社会形成力」「リーダーシップ力」「自己理解力」「問題解決力」「職業理解力」のうち、三川(2017)では「社会形成力」と「職業理解力」が、三川・前田(2018)および三川ら(2020)では全ての下位尺度が事後の平均得点が事前より有意に高くなり、受講によって「キャリアデザイン力」が高まっていることが示された。さらに、三川・前田(2018)は授業後に提出する小レポートの記述についてそれぞれ分析を行ったところ、授業外での活動との関係の振り返り、動機づけや態度の変化、今後の展望など、キャリア教育としての一定の効果が検証されたと報告している。

これらの先行研究の結果から、「職業としての心理学」という講義によるキャリア教育としての効果があることが示されている。その効果について、筆者はSavickas, M. L. の「キャリア構築理論 (Career

Construction theory)」が含まれていると考えている。キャリア構築理論について、堀越・道谷（2018）は「Super, D. E. のキャリア発達理論を引き継いで集大成したものである」とし、「差異心理学、発達心理学、力動心理学から包括的に捉えようとしていることが、この理論の大きな特徴である」と述べている。さらに、堀越・道谷（2018）はキャリア構築理論は個人がキャリアの意味を形成する解釈的および対人的プロセスに力点をおいてキャリア発達を説明していること、McAdams（1995）が提示した3つの視点を用いて「職業パーソナリティ」「キャリア・アダプタビリティ」「ライフテーマ」の3つの主要概念で構成されているとまとめている。

Savickas（2002）は、キャリア構築理論を、「Superの職業発達理論の日付のない拡張版」と説明しており、梶野（2015）はその改訂ポイントについて、①メタ理論の転換（認識論としての心理的構成主義に近づき、存在論としての構成主義から離れること）、②職業発達の捉え方を、内的成長から外的環境への適応へと転換していることとまとめている。また、キャリア構築理論の主要概念の1つである職業パーソナリティについて、堀越・道谷（2018）はキャリアに関連した能力、欲求、価値観、興味によって定義され、個人は職業用語を用いて自分がどんな人間なのかを表現しているとし、個人—環境適合（Person-Environment fit）理論に基づくホルランドのモデルを用いていると述べている。個人—環境適合理論について、下村（2015）はSavickasは、PとEに挟まれた「-」を論じており、PとEは完全にマッチングすることはないとし、継続的にPとEに対する意味づけや解釈を変化させていきながら次第に両者を近づけていくこと、そうすることでキャリアを作り上げていくことが重要になること、「適合性」＝マッチングという概念を、ある時点でなされるものとして固定的に考えるのではなく、長期間にわたって変化するものとまとめている。そのため、Savickasが考える共同作業とは、職業的な興味は社会的に構成されたものと同時に、職業の社会的な分類を示す枠組みとして活用できることであり、カウンセラーがクライアントに、興味を体系的に捉える方法を教えるだけでなく、職業や学部学科、趣味の活動のようなマクロな社会環境を構造化する方法を教えるためにも役立つと述べている（堀越・道谷, 2018）。

そして、Savickas（2011）は、キャリア構築理論を用いて、子どもの頃に尊敬していた人（ロールモデル）などを5つの質問を用いて明らかにしていく構

成主義的カウンセリング（constructionist counseling）を確立している。その特徴として「構成主義的キャリア・カウンセリングは、一致というよりは、むしろ価値づけ（mattering）を重視する」、「キャリア・カウンセリングは、過去の経験の意味と価値づけについて詳細に説明するだけでなく、意思と行動を促進させることによって、前途に待ち受けている世界との結合を鍛え上げる」と説明し、キャリア構築理論におけるキャリア・カウンセリングとは、クライアントによるナラティブ（物語）を基に、これまで構築してきたライフキャリアを振り返り、脱構築や再構築を経て、新たなライフキャリアを構築するための「共同作業」を意味することを強調している。キャリア構築理論の1つである質的キャリア・アセスメントについて、渡部（2015）は、「社会構成主義キャリア・カウンセリングを行う実践家が用いる、クライアントの過去・現在の価値観やライフ・ストーリーを紡ぎだすための手法であり、〈中略〉量的に標準化されたものではなく、個々人の特徴や差異、すなわち即ち『質』を重視したものであり、『タイプ分け』は必ずしも行われぬ」ものと述べている。「職業としての心理学」では、ゲストスピーカーである卒業生、修了生が自らの経験や体験を通して、どのように自己実現をめざしているのかというナラティブを語り、ライフキャリアの構築、脱構築、再構築を説明することを実施している。その中で、「多様かつ実践的な心理学的知識」を「さまざまな職業や実生活に活かしているか」という意味や位置づけ、意思と行動というテーマを語ることで、Savickasが述べているPとEに挟まれた「-」が具体化されることや、ゲストスピーカー自らの質的キャリア・アセスメントをまとめたものを講義を通じて受講生に説明し、その過程や個々人の特徴や差異について述べることで、受講生のキャリアデザイン力を高めるという「共同作業」が実施されているのではないかと考えられる。

一方で、「職業としての心理学」は卒業生が現在の仕事の中で心理学をどのように活用しているかについてライフキャリアの構築、脱構築、再構築をナラティブに振り返ることを講義形式に行っており、いわば学生のロールモデルの役割を担っていると言える。ロールモデルについて、溝口（2021）は「現代においてロールモデルは、特定の役割における行動の見本を示すだけではなく、行動や意思決定に対して様々な影響を与える人物」と定義し、ロールモデルの機能には「同一化する対象」「行動の手

本や参照基準」「刺激を与える存在」「支援や助言を与える支援者」があり、行動や意思決定に対して様々な影響を与える人物であると示している。また、ロールモデルが講義形式で語るることについて、溝口（2021）は、「キャリア形成支援の在り方としては、個人からの一方的な知覚のみで成立するロールモデルを学生に探索させるという取組みがキャリア教育においては効果的であると同時に効率的であると考えられる」とまとめており、このことからロールモデルが自らのキャリアをナラティブに語ることは、学生のキャリア形成において有効な働きかけを提供する役割であると考えられる。

「職業としての心理学」におけるこれまでの先行研究では、半期の履修期間を通じて、三川ら（2015）が作成した5つの能力という量的な測定とともに、自らのキャリア構築の振り返りや今後の展望を脱構築、再構築する質的な過程を検討しているが、本研究では各授業で提出をするレポートであるミニッツペーパーの記述に着目し、講義形式によるロールモデルによるナラティブの語りを通じて、自らのキャリア構築の振り返りや今後の展望を脱構築、再構築するのかについて、テキストマイニング技術を用いて解析し、その傾向を示すことを目的とする。併せて、受講生の学年の違いが自らのキャリアの振り返りの傾向に違いが見られるのかについても検討を実施する。

2. 調査方法

(1) 調査対象者

2023年度春学期に心理学総合科目「職業としての心理学」を履修し、2023年5月12日の講義に参加した受講生を対象に、講義修了後に講義の感想や振り返りを記入し習熟度を確認するミニッツペーパーの記載内容を本調査の分析対象とした。

なお、ミニッツペーパーは「職業としての心理学」のゲストスピーカーに共有されることは受講生に了解は得ているが、それを研究の分析対象として活用することの了解は得ていない。そのため、倫理的配慮として、7月3日から18日に「職業としての心理学」のKnowledge Deliverにて調査研究の依頼を掲載した。依頼文には統計解析を実施するため個人が特定されることはなく不利益が生じることがないこと、コメントを調査に使用されたくない場合はメールにて申し出てもらうオプトアウト方式にて了解を得ると同時に、依頼文を確認していない受講生

も本研究に了解していないとみなし、最終的に2年生75人、3年生31人、4年生10人の計116名を調査対象者とした。

(2) 調査方法

受講生のミニッツペーパーの記載内容について、KH Corderを用いたコーディング及び計量テキスト分析を行い、ミニッツペーパーに共起する語の探索と、各学年の特徴語及び対応分析を行い、視覚的な探索を行った（樋口, 2020）。

分析を実施するにあたり、前処理として誤字脱字や「・」の有無（キャリア・アダプタビリティなど）を分析前に修正したこと、講義内容で使った語が抽出されるよう、「キャリア危機」「キャリア・アダプタビリティ」「変幻自在」「変幻自在的存在」「心理学」「よりよい生き方」「教育ボランティア」「人と関わる入口の学問」「社会構成主義」を強制抽出語として、また、筆者について記載した内容「四宮」「四宮さん」「講師」や筆者への謝意「ありがとうございました」「ありがとうございました」を抽出しない語として指定を行った。

(3) 講義内容の概要

講義は四宮（2023）の論考を基に行った。大学入学以降に3つの転機があったこと、自らのキャリア危機の中にも新たな分野に挑戦するチャンスが生まれ、現在の考えが再構築されたことなどに加え、以下の内容を追加した。1つ目に、キャリア構築理論のメタ理論となる「社会構成主義」について、Gergen（1999）を基にした説明と日常場面（男性のビジネスシーンにおいて適切な服装はどのようなものか）を用いた解説を行った。2つ目に、四宮（2023）では自らの専門についてごちゃまぜと記載したものを「変幻自在的存在（Gergen, 2008）」と定義し直し、さまざまな対人援助職を通じて不確実な時代において心理学を用いて援助を実施することとは、相手と共同で責任を持ち、生み出す「相互作業」であること、また相手が求めている完全な答えは出さず、今ここでできる考えや方法を「今の解」と表現し、それを導き出し評価し相互作業を継続しながらアップデートをすることが重要であることを強調した。3つ目に、「80%の人が該当するものが10個あった場合、その10個すべてに該当する確率はどれくらいか」という数式を用いて、その確率が約10%であることを示し、「私たちは全員『マイノリティ』である」という言葉を用いて関わる人との

違いがあることを説明し、お互いが該当したり納得がいくものを構築するためには対話を用いた相互作用が必要であり、それは専門職を目指す人にも活用できる「よりよい生き方」のお守りとなるため、今後の心理学の学びに活かしてほしいことをメッセージとして追加した。

3. 結 果

まず、KH Corderを使用したテキストマイニングの手法を用いて共起ネットワーク分析を実施して可視化し、検討を行った。また、その結果について、単語の共通性を確認しながらカテゴリーごとにタイトルをつける作業を行った。共起ネットワークとは、

中心性に基づいて、語の出現頻度や語と語の結びつきの程度に応じ、円の大きさや色あるいは円を結ぶ線の大きさによって表わされるものであるとされているが、共起ネットワークでは、線で結ばれているかどうか重要であり、近くに付置されているだけで、線で結ばれていなければ、共起関係はない点に注意することが必要である(樋口, 2020)。ミニッツペーパーに記載されていた内容のうち、上位50語による共起ネットワークの結果を図1に示す。その結果、6つの共起ネットワークが形成されていることが示された。また、形成されている共起ネットワークが文脈の中で使用されているかについて、KWICコンコーダンスを用いて抽出を行った。

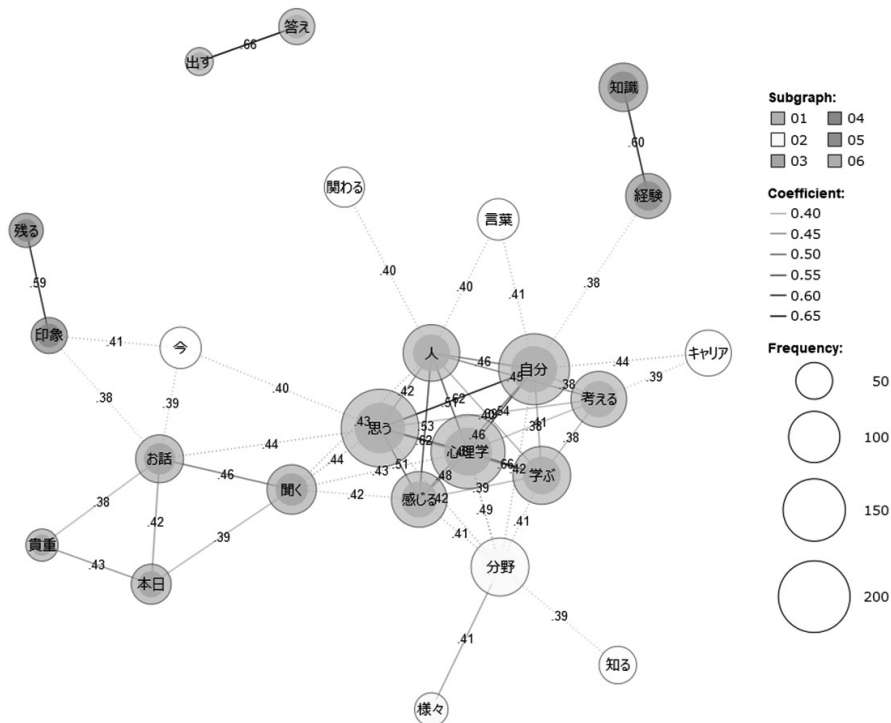


図1 ミニッツペーパーの記述による共起ネットワーク (N=116)

01群は、「心理学」「自分」「人」「学ぶ」「考える」「感じる」といった語が抽出され、学生が「職業としての心理学」の授業を通じて心理学と自分について思ったことや考えたこと、感じたこと、学んだことについて振り返った群だと推測される。02群は「分野」「様々」の群で形成され、また「分野」は01群とつながっていることから、心理学がさまざまな分野で活用できることが印象に残ったという群だと表1

のコメントの抜粋から推測される。03群は、「お話」「本日」「貴重」「聞く」といった語が抽出され、また「お話」「聞く」は01群とつながっていること、04群は「印象」「残る」で構成されており、また03群の「お話」や「今」という独立した語を介して01群の「思う」とつながっており、筆者の講義を聞いて学生自らが考える心理学と比較し、学生が思ったり感じたりしたことが記述された群であることが推測さ

れる。05群は「知識」「経験」で構成され、また01群の「自分」とつながっており、知識と経験は両輪でありどちらも自らのキャリアとなるという「自己理解力」や「職業理解力」と関連した群だと表2のコメントの抜粋から推測される。06群は「答え」「出す」で構成されており、講義内で追記した内容である「答えは出さず、今の的解を導き出すこと」につ

いて述べたものだと考えられ、表3のコメントの抜粋からも筆者の講義内容の中で印象に残った内容として記述された群であると推測される。その他、群として形成されなかった「キャリア」「言葉」「関わる」「今」が記述の多かった独立した語として抽出されており、講義の中で印象に残った語であると考えられる。

表1 「分野」、**「様々」**群（02群）で記載されたミニッツペーパーの抜粋記述

…教育分野や人権分野、社会福祉分野、研究補助分野に携わってきたと聞き、 様々な分野 に携わることもできるのだと、視野が広がったように感じました。…
…また、必ず一つに絞らなくても、 様々な分野 に関わり、自分に合ったものを見つけていくということも、より良い生き方にできる一つの方法でも…
…どのように支援できるかを考えておられるということを知りました。 様々な分野 に関わった先生にしか感じられない考えがあると思います。…
…実践したりしたいと考えた。そして、今回の講演を聴いて心理学は 様々な専門分野 が存在しており、心理職として一つの分野に限らず…
…入学前は心理カウンセラーなどの仕事しか心理職のイメージはありませんでした。 様々な心理分野 に触れることが大切だと話していましたが、その言葉にとっても共感しました。…
…大学生の頃から興味のある 分野 を専門としていてと思っていた。様々な 分野 で活動することもできると知り、驚きました。座学だけでなく経験を通して…
…合わせて行うということも可能なのだと感じました。 様々な分野 を合わせて行うことで新たな気づきが生まれるのだということに気づくことができました。…
…社会福祉、医療研究倫理など、心理学を主としない分野で業務を行うことによって、 様々な分野 の視点を持つことができ、客観的な視点を獲得することができた。…

表2 「知識」、「経験」群（05群）で記載されたミニッツペーパーの抜粋記述

…今回の講義を通して、「 知識 だけでなく 経験 を通して知識を深める重要性」という言葉が印象に残りました。私は、心理学を…
…今の自分にとっても重要なことだと思いました。また、その自分の興味関心を 知識 だけでなく 経験 を通じてより深く知っていくことも大事だと学びました。…
…私も三川先生の言葉を見て、感じるものがありました。例えば、 知識 だけでなく 経験 、というところです。知識だけ持っていて、…
…その中でも 知識 だけでなく、 経験 を通して 知識 を深めるということが重要だと改めて気づくことができました。確かに、大学4年間で…
…興味があるので、さっそく教育ボランティアをやってみたいと思います。 経験 の上にある 知識 を作り出せるように頑張ります。ありがとうございます。
…とても興味関心があるので、今回の講演はとても自分のためになったと感じる。 知識 だけでなく 経験 を通すことが大事ということに気づかされた。…
…大学生はある程度自我ができての 知識 だけでなく 経験 を通して知識を深める重要性に気づいたとおっしゃっていたのが印象に残りました。…
… 知識 を学ぶということ自体は、小学生から現在にいたるまで何度もやってきたがその 知識 を実際の 経験 で使ったことはほとんどないと感じる。…
…初めて 経験 することもありました。 経験 するまでの 知識 と 経験 した後の 知識 では違いがあるということにとっても共感しました。…

表3 「答え」、「出す」群（06群）で記載されたミニッツペーパーの抜粋記述

…学びをこれからの人生に生かせるようにしたいと思いました。それと白黒思考をやめて 答え を出さない考え方に変えられるようにになりたいです。
…心理学という学問と向き合うことで、今後に備えられるのではないかと考えました。また、 答え を出さないという部分が特に印象に残りました。たとえば、…
…より良く生きること」だと学びました。心理学というのは人と関わる入口の部分であり、 答え を出さないことが大事だと考えている。とおっしゃっていて、…
…学びました。そして、その中でみんなが納得する 答え を出すにはやはり対話が重要なのだと改めて気づくことができました。私自身、…
…色々な分野で活躍できるように私もなりたいたいと思いました。また、 答え を出さないという考えがとても良いなと感じました。なにかと 答え や…
…個々のキャリアが大事だと考えました。相手の問題を克服するのをサポートして一緒に 答え を出さず、今できる 答え を作るとするのが、今の…
…の的解を導くことが大事ということ。これは、私も深く共感しました。 答え を出してしまうとそこで考えることが終わってしまいます。しかし、 答え を出さずに…
…これからの三年間大学で心理学を学ぶことによって、最初から 答え を出さずにアップデートしていけるように考え方を持てるようになると…

表4 学年別特徴語の分析結果（数値はJaccard係数）

	2年生 (n=75)	3年生 (n=31)	4年生 (n=10)
学ぶ	.449	感じる	.351
考える	.441	人	.290
分野	.387	思う	.284
今	.379	心理学	.270
経験	.377	聞く	.264
お話	.372	言葉	.262
今回	.360	お話	.250
本日	.352	学ぶ	.241
貴重	.337	社会	.227
キャリア	.337	分野	.214
		探す	.214
		成果	.200
		当然	.200
		部	.188
		見える	.182
		生きる	.174
		対話	.172
		狭い	.167
		思考	.167
		選択肢	.167

次に、2年生 (n=75)、3年生 (n=31)、4年生 (n=10) それぞれに特徴語として表出した上位10単語を、算出したJaccard係数とともに表4に示した。Jaccard係数とは、語が共起しているかどうかを重視する係数であり、1つの文書の中に語が1回出現した場合も10回出現した場合も単に「出現有」と見なして、語と語の共起をカウントすること、また、Jaccard係数には、語Aと語Bのどちらにも出現していない文書が多数あったとしても、それによってAB間の係数が大きくならないという特徴があるため、1つの文書に含まれる後の数が少なく、それぞれが一部の文書中にしか含まれていないようなデータでは、語と語の関連を見るための分析に適している (樋口, 2020)。

その結果、2年生は筆者の話から主に「学ぶ」や「考える」といった自らを振り返ることが、3年生は心理学という学問を通じて「感じる」ことや「社会」という未来について考えることが、4年生は具体的な将来への選択肢を探す際、自らの価値を探すことを対話を通じて思考することが特徴として挙げられる。

最後に、外部変数として用いた参加者の学年と、抽出された上位30語の対応分析を2次元の散布図に示した結果を図2に示した。対応分析の図は、原点(0,0)付近にはこれと言って特徴のない語が集まり、成分1、2それぞれに応じ2年生、3年生、4年生および抽出語がプロットされており、各学年に近い抽出語ほど関連性が高い語であることを示している。

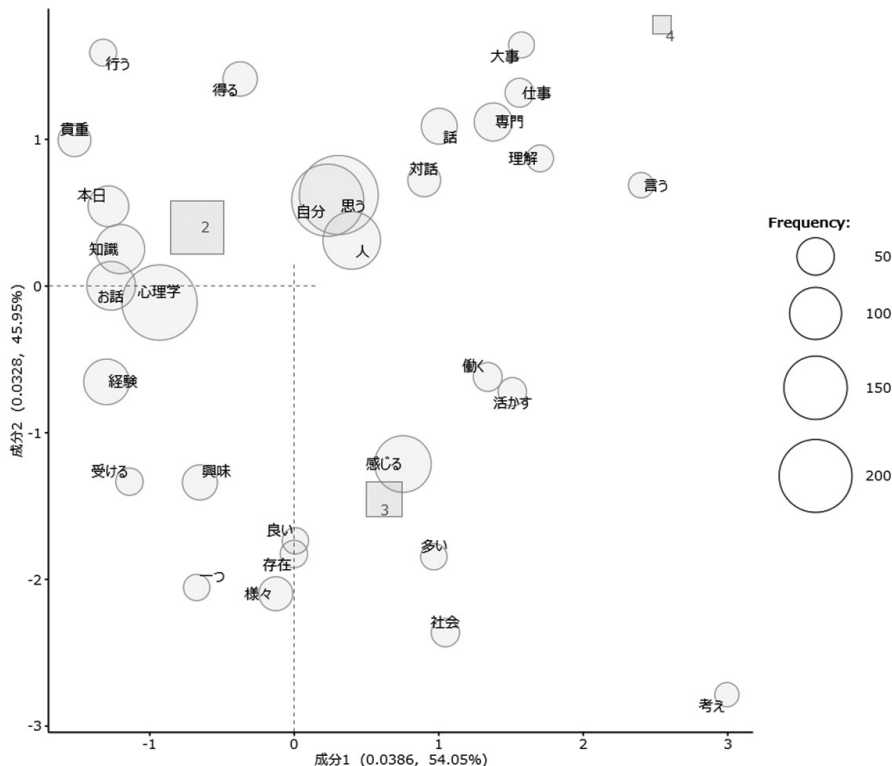


図2 ミニツペーパーによる記述の分布と各学年の特徴 (N=116)

まず、2次元の成分1、成分2について検討を行った結果、成分1は「対象」軸と名づけた。プラスの数値が上昇すると内容から自らを客観的に振り返る傾向があり、マイナスの数値が上昇すると自らの考え方や価値観など主観的に振り返る傾向があると考えられる。成分2は「内容」軸と名づけた。プラスの数値が上昇すると筆者が客観的に学問や経験

を語った内容を振り返る傾向があり、マイナスの数値が上昇するとそれを筆者が主観的にどのように考えたかについて語った内容を振り返る傾向があると考えられる。次に、対象軸の内容を基に学年別で分析を行った結果、講義内容から2年生は自分についてやや主観的に、3年生は自分について客観的に、4年生は自分について強く主観的に振り返る傾向が

示された。また、内容軸の内容を基に学年別で分析を行った結果、講義内容から2年生は日常と関連づけるなどやや客観的な内容に、3年生は自らの学びを社会にどのように活かすかという主観的な内容に、4年生は将来の自らの日常を客観的に振り返る傾向が示された。対象軸、内容軸それぞれを統合すると、講義内容から2年生は「自らの日常と関連づけて振り返る」こと、3年生は「自分について学んできた心理学をどのように活かすかを振り返る」こと、4年生は「自分の大学生活全体や今後の就職、進学について振り返る」傾向が示された。

4. 考 察

本研究では、心理学総合科目「職業としての心理学」を履修した学生が講義形式によるロールモデルによるナラティブの語りを通じて、自らのキャリア構築の振り返りや今後の展望を脱構築、再構築するのにかつて、ミニッツペーパーの記述を基にテキストマイニング技術を用いて解析し、その傾向を示すこと、また、受講生の学年の違いが自らのキャリアの振り返りの傾向に違いが見られるのかについても検討を実施した。その結果、全体では受講生が心理学と自分について思ったことや考えたこと、感じたこと、学んだことを中心に今後のキャリアについて新たな知見が得られるといった共起ネットワーク図が示されたこと、また、学年別で分析を行ったところ、振り返りで重点を置く部分が異なる傾向の違いが示された。興味深い点として、①就職活動の準備をしている時期の3年生のみゲストスピーカー（筆者）が語った主観的な内容について感想を述べる傾向があること、②対象軸で示された講義内容を2年生は内容から客観的に振り返り、その後学年が上がるにつれて自分について振り返るという方向が示され、このことから学生の感想による省察から学問（心理学）に対する自己理解が深まること、また学年が上がるにつれて深まる傾向が高まる傾向があることが示された。

キャリア構築理論を提唱したSavickas（1993）は、キャリア・カウンセリング場面では、クライアントが生きる意味や働く意味を「語り、語り直す過程（a process of storying and restorying）が焦点になる」と述べており、野淵（2006）は（キャリア）カウンセラーの役割を、①カウンセラーは、クライアントが生きる意味や働く意味を含めて、これまでの人生の体験過程、実現したいことやキャリア等について語

り、語り直すように勧める、②ストーリーとして語られる事柄の中にクライアントの生きるテーマや意味、問題等を協同で見出し、それらについてクライアントが語り、語り直すことができるよう援助する、③クライアントがこれまでのキャリアに関する体験やエピソードを語ったり、それを将来のキャリアと関連づけて語り直すことができるよう援助する、とまとめている。また、溝口（2021）がロールモデルとなる人が講義形式で語ることの効果について指摘するように、ロールモデルが自らの探索し、その意味や位置づけを語ることで受講生のキャリア探索を促すという取組みが行われており、この「語り、語り直す過程」について「職業としての心理学」ではまずゲストスピーカーが①～③について実施した後、学生がミニッツペーパーを通じて①～③を実施していると整理することができる。また、学年別で振り返りの内容に違いが見られることも学生が自らの生きるテーマや意味、問題が違うことによるものだと考えられる。

さらに、湯口（2021）はロールモデルとレジリエンスがキャリア探索に及ぼす影響について大学1、2年生を対象とした調査を行ったところ、ロールモデルは自己探索への直接効果のパスは有意な差が見られたが、環境探索への直接効果のパスは有意でなく、その理由として環境探索は3年生になってから情報探索を行っており、ロールモデルの存在だけでは、一歩踏み出す行動につながらなかった可能性が考えられると述べている。本研究においても、抽出語を用いた対応分析において、学年が上がるにつれて主観的な振り返りから客観的な振り返りを行う傾向があること、また3年生、4年生は自らが働くことを意識し心理学を活かす振り返りを行う傾向が見られたことから、溝口（2021）がまとめた「同一化する対象」「行動の手本や参照基準」「刺激を与える存在」「支援や助言を与える支援者」を学生各々がいずれかにロールモデルを当てはめて学ぶことが示唆された。

最後に、本研究の限界と展望について述べたい。本研究は筆者が実施した講義1回を分析対象としたため、あくまでも筆者の講義内容が学生にどのようなキャリア探索、キャリア形成に影響を与えているのかについての分析と考察にとどまる。一方で、本研究を三川（2017）、三川・前田（2018）、三川ら（2020）の研究を組み合わせることで、学生のキャリア形成を適切に提供できているか、またどのようなキャリア構築の振り返りや今後のキャリアを展望

し、脱構築、再構築するかという過程を具体的な変化を、文部科学省（2019）がキャリア教育において推奨している「キャリア・パスポート」と同じような効果が期待できるのではないかと考えられる。文部科学省（2019）はキャリア・パスポートの目的を「小学校から高等学校を通じて、児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につながるもの」であり、「教師にとっては、その記述をもとに対話的にかかわることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導に資するもの」であると整理している。このことから、本研究及び三川（2017）、三川・前田（2018）、三川ら（2020）の研究を組み合わせることにより、学生自らが成長を促し、自らを指導する材料とし、自らの学習状況やキャリア形成を見通す、振り返る、評価するとともに主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につながるというキャリア構築の振り返りや今後の展望を脱構築、再構築するというSavickasのキャリア構築理論に沿って、STUDY GUIDEに記載された人材を育成することが期待できると考える。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、心理学総合科目「職業としての心理学」を受講した皆さんの振り返りを書いてくださった学生の皆様、また研究に協力してくださった学生の皆様にこの場を借りて御礼を申し上げます。また、このような機会を設けていただくとともに、研究を快く了承してくださいました追手門学院大学心理学部の駿地眞由美先生に感謝申し上げます。

引 用 文 献

- Gergen, K. J. (1999). *An invitation to social construction*, Sage Publications. (ガーゲン, K. J. 東村知子 (訳) (2004). あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版)
- Gergen, K. J. (2009). *Relational being: Beyond self and community*, Oxford University Press. (ケネス・J・ガーゲン (著) 鮫島輝美・東村知子 (訳) (2020). 関係からはじまる ―社会構成主義がひらく人間観 ナカニシヤ出版)
- 樋口耕一 (2020). 社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第2版 ナカニシヤ出版
- 堀越弘・道谷里英 (2018). マーク・サビカス：キャリア構築理論 渡辺三枝子 (編著) 新版キャリアの心理学 [第2版] ―キャリア支援への発達のアプローチ (pp. 85-109) ナカニシヤ出版
- 梶野潤 (2015). キャリア構築カウンセリングの理論とプロセス ―職業発達理論からキャリア構築理論へ 渡部昌平 (編著) 社会構成主義キャリア・カウンセリングの理論と実践 ―ナラティブ、質的アセスメントの活用 福村出版 pp.136-175.
- McAdams, D. P. (1995). What do we know when we know a person? *Journal of Personality*, 63, 365-396.
- 三川俊樹 (2017). 職業としての心理学 ―キャリア教育の視点から見た効果について 追手門学院大学心理学論集, 25, 51-57.
- 三川俊樹・藤田尚宏・前田雄一 (2020). 職業としての心理学 ―キャリア教育の視点から見た効果について (3) 追手門学院大学心理学論集, 28, 7-14.
- 三川俊樹・石田典子・神田正恵・山口直子 (2015). 高等学校におけるキャリア教育・職業教育の効果に関する研究 (2) ―キャリアデザイン力尺度の再検討 追手門学院大学心理学部紀要, 9, 69-84.
- 三川俊樹・前田雄一 (2018). 職業としての心理学 ―キャリア教育の視点から見た効果について (2) 追手門学院大学心理学部紀要, 12, 63-74.
- 溝口侑 (2021). キャリア形成支援におけるロールモデルの機能と関係性 京都大学大学院教育学研究科紀要, 67, 375-388.
- 文部科学省 (2019). 「キャリア・パスポート」の様式例と指導上の留意事項
- 野淵龍雄 (2006). マーク・L. サヴィカスのキャリア理論 (その2) 相山女学院大学 人間関係研究 5, 55-58.
- Savickas, M. L. (1993). Career counseling in the postmodern era, *Journal of Cognitive Psychotherapy, An International Quarterly*, 7 (3), 205-215.
- Savickas, M. L. (2002). Career construction: Developmental theory of vocational behavior. In D. Brown (Ed.), *Career choice and development*, 4, (pp. 149-205). CA: Jossey-Bass.
- Savickas, M. L. (2011). *Career counseling (theories of psychotherapy)*. American Psychological Association. (サビカス, M. L 日本キャリア開発研究センター (監訳) (2018). キャリア・カウンセリング理論

〈自己構成〉によるライフデザインアプローチ
福村出版)

下村英雄 (2015). コンストラクション系のキャリア理論の根底に流れる問題意識と思想 渡部昌平 (編著) 社会構成主義キャリア・カウンセリングの理論と実践 ―ナラティブ、質的アセスメントの活用 福村出版 pp.10-43.

四宮康亮 (2023). キャリア諸理論で振り返る「私」と「心理学」との関係 追手門学院大学心理学論集, 31, 64-65.

駿地真由美 (2023). 特集：職業としての心理学 追手門学院大学心理学論集, 31, 51.

渡部昌平 (2015). 質的キャリア・アセスメントとその応用 渡部昌平 (編著) 社会構成主義キャリア・カウンセリングの理論と実践 ―ナラティブ、質的アセスメントの活用 福村出版 pp.76-103.

湯口恭子 (2021). 大学生のキャリア探索とレジリエンス：効果的なキャリア支援のために (Doctoral dissertation, 関西大学).